

# 教 仏 名 聞

第47号  
(発行日)

2014年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

# 智慧の光明はかりなし

智慧の光明はかりなし

有量の諸相ごとごとく

光暎かぶらぬものはなし

真実明に帰命せよ

《現代語訳》

(智慧の光明は無限であって、有限のすべての人間に光明を蒙らせる。真実明に帰命せよ)

《語句》

智慧——煩惱を断じた徳。光明の本体。はかりなしは限界なし。

有量の諸相——あらゆる有限の衆生。

光暎——光明は衆生の闇を除くので、暎に譬える。

真実明——真実の智慧の光明。弥陀の別号とする。

帰命——仏の教命に帰順する。仏をたのむこと。信心を現す。

(名畑応順校注「親鸞和讃集」より)

\*

このご和讃は曇鸞大師の作られました『讚阿弥陀仏偈』の

「智慧の光明量るべからず。

ゆえに仏をまた無量光となづ

けたてまつる。有量の諸相、

光暎をこうむる。このゆえに

真実明を稽首したてまつる」

の部分で親鸞聖人が和讃されたものです。

ここで言われています「智慧の光明」とか「真実明」と

いうのは阿弥陀仏のことであり、阿弥陀仏のお徳をこうい

う言葉で表しておられるので

す。

阿弥陀仏とは何か、どうい

うお方であるか、ということ

については、「光明無量・寿命無量」といわれてきました。

すなわち「光かぎりなく、いのちかぎりなきはたらき」それを阿弥陀仏というのである

と。

阿弥陀仏という言葉の、「阿

弥陀」の原語は梵語で、「アマターアーバ」と「アマター

アーユス」の二つの内容があり、それに仏(ブツ)の語を重ねた言葉が阿弥陀仏と言

われています。

梵語のアミター

アーバとは、アミ

タは無量、無限と

いう意味で「アー

バ」は光明、光と

いう意味です。で

すからアミターアーバは無量

の光明という意味です。また

アミターアーユスの「アーユ

ス」は寿命、いのちという意

味で、アミターアーユスは無

量の寿命という意味です。

そして、光明無量と寿命無

量の関係は、無量寿命は体(

本体)であり、光明無量は用

(はたらき)と云われています。

親鸞聖人のお弟子の慶信

が、聖人宛のお手紙の中で

「寿命無量を体として、光明

無量の徳用はなれたまわされ

ば」

と書いておられ、それを聖人

は了承しておられるようで、

こういう了解が聖人の当時か

らなされていたのでありまし

よう。

そういうことで阿弥陀仏は

寿命無量を本体とし、光明無

量の用きをしてられるお方と

いえましよう。

このご和讃で

「智慧の光明はかりなし」

と阿弥陀仏のお徳をたたえら

れ、阿弥陀仏は智慧の光明で

あるといわれています。

どうしてそういえるのでし

ようか。

それは想像してみますに、

インドで、遠い遠い過去に人

生の問題に悩み抜き、心は全

く暗くなり、何が真実である

か全く分からなくなった、そ

ういう困り果てた人が真剣に

救いを求めている中で縁あつ

て「まことなるもの」にふれ

## 《 盂蘭盆会法要 》

八月十日(日)

午後二時始まり

\* \* \*

\*法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

\*八月十二日と八月二十一日の集まりはありません。

\*八月二日(座談会)・八月六日(聖典学習会)はあります。

た。そして心が開かれて明るくなり、何が真実であるかが分かり、物事の真相が見えるようになった。そういう光明体験をした人がいて、そういうお方が、であつた(まこと)を「はかりなき光よ、はかりなきいのちよ」と感得し、それを(無量の光明と寿命)といい表した。それが次々と追体験されてきた。

そう言い表してきた歴史の中核に釈迦如来様がまします、ということではないでしょうか。

遇つてであつた「まこと」を光と感じ、いのちと感ずる。そういう体験がもとにあつて、そういう「まこと」をいろいろと言ひあらわされてきたのでありましょう。その中で、そういう功德(用き)を無量光とか智慧光とか歓喜光とか難思光などと釈迦如来様によつて説かれたのでありましょう。

私たちの心を開き、明るくし、充実させ、安らぎをもたらし、量りなきいのちにあずからしめる、そういう「真実なるもの」に触れた経験をもとにして、それを他の人々に示すときに、それをどう表現するか。その表現する言葉の

違いから、宗教全般においては神ともいわれ、仏とも説かれるようになったとも言えるのではないのでしょうか。

ただ、問題はその神とか仏と表された「真実そのもの」をどう正確に詳しく適切に表現するか、あるいは少しか表現していないか、あるいは誤って表現しているか、などはいつても問われなくてはならないでしょう。というのは、神や仏を語りながら似て非なる宗教が少なくないからです。中には人の一生を破滅させるようなものもありますから。

私見ですが、この点で、浄土真宗の教法は、その「永遠なるまこと」を正確にして精確に表現した教えだなあと思つています。

「真実そのもの」はどういうものであるのか、それを教える教育が大事ですが、これが日本ではほとんどなされていません。ですから、真実の宗教と仮りの教え、あるいは邪(よこしま)な(教え)を見分ける力が養われていないのが現状です。

曇鸞大師は仏教の教えを求

めている中で、そういう光明体験、より正確には光明名号の体験をなさつて、心が開け、であつた真実を「智慧の光明量るべからず」と讃えられるのであります。それを受けられた宗祖聖人もそれに同感されてこの和讃を製作されたのでありましょう。

次に

### 有量の諸相ごとごとく

#### 光暁かぶらぬものはなし

とあります。ここで「有量の諸相」という聞き慣れない言葉が出てきます。これは有限な姿形を取っている様々なものということ、世界の万物のことです。ただここではその中で、一切の生きとし生けるものごとと受けとつていいでしょう。

「有量」とは、はかりあるもの、限りあるものということです。このお言葉で直ぐに身近に感じるのはいのちが量りあるもの、「いのちの限りあるもの」のことです。それは、生まれて死ぬものとして生きていくもの、いわゆるいのち限りある有情のことです。

かならず死ぬ身を生きていくもの、それが一番具体的な

(有量)である私たちの相(すがた)です。そこに苦悩があるのです。生まれて死なねばならない。どこまでも生きていけど死なねばならぬと言う根本矛盾を抱えている存在が「有量の諸相」である私のがたです。

このような私たちすべてに「光暁かぶらぬものはなし」

で、量りなき智慧の光明(光暁)が働きかけて下さつていく、と詠(うた)われています。

この光明に触れると、長々と無明(まよい)の闇に閉ざされていた私たちの心に、阿弥陀仏の光明が差し込んで、無明の夜が明けてくるのであります。それはちようど朝があげようとして暁になるように。

心の闇は長く深いのですが、そこに初めて仏の光が入つて下さる。そしてやつと夜明けになった。そのことを宗祖聖人は『尊号真像銘文』に「信心をえたる人をば無碍光仏の心光、つねにてらしまもりたまうゆえに、無明のやみはれ、生死のながきよ、すであかつきになりぬとしるべしとなり。」と仰せられています。

ということは阿弥陀仏の光明に触れると、今までは自分には分からなかつたけれども長い間、生死流転し、ずっと心は閉塞し、あたかも暗き部屋に閉じこもっていたようなものであつたのだと知らされます。「無明長夜」を流れ転がってきたのであると知らされます。

このような、いのちに限りのある身に阿弥陀仏の光明名号が、私たちを呼び覚ますべく働きかけて下さつていく。光明名号の用(はたら)きをいつでも今ここにこうむっている。その現実的ですが、口に称えられ耳に聞こえる南無阿弥陀仏であります。それは大悲の仰せであります。松並さんの歌に

「命に限りのある身に  
聞くに限りのない慈(なごき)  
うけて蒙(こうむ)る南無阿弥陀仏」  
とあります。まさにこのご和讃のお心といつてもいいでしょう。

なお、阿弥陀仏は無量の光明であるとともに、その本体は無量の寿命であると述べました。そういう無量の寿命と「有量の諸相」の関係をもう

少し考えてみたいと思いま

す。阿弥陀仏は無量のいのちであると言われていますが、それに対して「有量の諸相」とはどういうものでしょうか。有量のもろもろの相（すがた）とは、無量のいのちに対して有量のいのちということでしょう。

では有量のいのちとは何かといえ、ある時生じてある時滅するいのち、ということですから、万物がそれであり、月も太陽もやがて滅ぶといわれています。地球もあと数十億年したら滅ぶといわれています。そうするとあらゆる物は皆生じて滅するもので、すなわち、まさに有量（有限）のさまざまな相といわねばなりません。そういう万物のなかで、心ある物が有情であり、衆生であります。

そして、こういう有限な諸物と量りなきいのちとはどういう関係があるのか。それについて分かりやすい譬えで、禅の名僧といわれた内山興正禅師が教えて下さっています。

それは、有限な物をさまざま雲にたとえ、無量のいのちを大気に譬えて下さってま

す。

目に見えない無量の大气の中に、縁あってさまざまな雲ができる。雲は生じては消えていくが、それは大いなる大気の中において生成されるいは生じるさまざまな雲の存在であります。大気を離れて雲はないのであります。

このように、私たちの限りあるいのちは、どこにおいて成立しているかという無量のいのちの用きの中で可能であり、その用きを離れて私たちの存在は成立しない。

私たちは阿弥陀仏の量りないいのちの中に、無明を因として生まれたのでありましよう。そして生まれたものは必ず滅するのであります。しかも、無明が続く限りそういう生滅を繰り返しているのだと、仏教では説かれています。決して阿弥陀仏が私という存在を創造したのではありませぬ。阿弥陀仏は、絶対神のような創造者ではありません。私たちは無明を因とし有量の諸相として生成した有限な存在なのだといふ教では説かれています。

またある仏教者は、無量のいのちと私たちの有量のいのちの関係は、大海と渦潮の渦

巻のようなものだと譬えられます。これも分かりやすい譬えですね。もちろんどこまでも譬えですから十全に表現することは出来ませんが、イメージすることはできましよう。

渦巻きは大海を離れては一瞬も存在できませんし、大海の中で初めて成立します。しかも生まれてはしばらくして消えていきます。

そういうことで、寿命無量の阿弥陀仏は私たちの存在成立の場所でありま。それを離れては私たち有量のいのちは一瞬も存在できない。

ただ私たち有情は、無量のいのちに気がつかない。寿命無量の阿弥陀仏が私の存在根拠であることを見失って、意識的に孤立化し閉塞し、いのちを「我が物」として所有化してきたのが私たちだといえましよう。迷いゆえに閉塞して心暗く、不安定な生を繰り返してきたのです。仏教ではこうした意識的に閉塞された暗い領域を、地獄道とか餓鬼道とか畜生道とか人間道とか天上道とか示されていて、その中で長々と流転してきたのだと教えられています。

そういう私たちの存在の足下に、いつでも今ここに私たちのいのちの成立根拠であり、いのちの基盤である無量のいのちすなわち阿弥陀仏がましますのであります。

その阿弥陀仏が、まことのいのちを見失って流転している私たちに「帰命無量寿如来」（南無阿弥陀仏）と喚びかけられるのです。「無量寿如来に、帰命せよ、たのめ、まかせよ」と喚んで下さる、それがお名号、南無阿弥陀仏であります。それを足利義山師は歌に

はかりなき

いのちのほとけ

ましまして

われをたのめと

喚びたもうなり

とあります。量りなきいのちの仏は、助けたもう大悲の心を御名に表し、南無阿弥陀仏と、私たちに喚び続けておら

れるのです。名号に「汝をまらるる引き受けて助ける」の大悲のお心を聞く。そこに「聞くに限りのない慈」を感じるのであります。

そして

光暁かぶらぬものはなし

眞実明に帰命せよ

で、私たちの無明の闇を破つて光明無量のお浄土へとみちびきたもう「光暁」（光明）は万物を照らし、一切衆生を照らし続けておられる。その眞実なる光明（眞実明）である阿弥陀仏に帰命せよ、帰せよと仰せられるのであります。帰命せよとは帰順せよというところで、より具体的には阿弥陀仏の仰せ、本願の思し召しに聞順せよとお勧め下さるのであります。聞順すなわち仏の仰せにすなおに聞きしたがう、そこに無明の闇夜はあけてくるのであります。

（了）

## 《秋季彼岸会》

九月二十二日（月）

午後二時始まり

\*彼岸会終了後、帰敬式を（おかみそり）執行します。ご希望の方は申し込んで下さい。（九月五日までに）

# 木村無相さんの法信 23

(昭和五十八年九月九日のお便り)

さて、今日は、お手紙の(三)について、返事書きます。(三)は大分長いが、

如来の願心、大悲心がこの凡心にはなれずに働いておられるお姿を信相というのでなきやと思われます。

「信相」というのか、どうかは、真宗の学問教義を大学で学ばないので知らないが、そういうのかもわかりませぬね。それはともかくとして、

如来の願心、大悲心、もつというのと、如来そのもの、佛心そのもの、如来の願心、が、向うから、ワレワレ煩惱、妄念の凡心に、ハナレナイという意味での「佛心凡心一体」となって、ハタラキたもうとき、これを、「眞実信心」と名づけるようですね。

眞実信心というナニカ特別のものが、如来、仏心というモノノ、ホカにあるのではなく、如来そのもの仏心そのものが、ワレワレの凡心に向うから一つになってくださったって、ハタラキたもうことを、「仏心、凡心、一体」「佛凡一体」といい、この場合、「如来」「仏心」のオハタラキを名づけて「他力廻向の信心」とか「如来廻向の信心」とかいうようですね。

「信心」という特別なものが、「如来」以外、「仏心」以外にあって、ソレをもちょうのものはなくて、「如来そのもの」「仏心そのもの」「願心そのもの」が、ワレ

ズ、生きて、ハタラキタモウ、ソレヲ「眞実信心」とか「他力廻向の信心」とか、いうようですね。

仏心が凡心をはなれず、凡心にはたらし、照らしたもう。そこに廻向のことばがあると思ひます。

とあるが、そのトオリでしょう。仏心(大悲心)が、凡心に向うから、一体不離になればこそ、

大悲無倦常照我  
とワレワレの凡心を、常不断に照らしたまい、ワレワレをして、自身の「機」スガタを知らしめてやまんでありましよう。

それを「信心」といい、「信心の生きたハタラキ」でありましよう。「信心」とは「凡夫の信ずるココロ」というような静止的なものではなくて

大悲無倦常照我  
と、常に生きて、ワレワレの「機」を、常不断に照らしたもう、如来、仏心、大悲心のワレワレに於ける活きたハタラキ

大悲無倦常照我  
と常不断に、照らしたもう「活きたハタラキ」を「信心」と名づけるので、その「お照らし」を凡夫の方から「如来廻向の、如来眞実の、眞実信心」といただくのでありましよう。

それで、仏心が凡心とはなれず、仏心凡心一体不離に、現実に生きてハタラキたもう、それは「如来廻向である」とい

ただかざるを得ぬ、「如来廻向」とあおがざるを得ないのであるまいか。

「如来の廻向」によらざれば、向うから、如来の御廻向によって、大悲無倦に、常不断に照らされることなくしては、この「無仏法者」の凡夫が「我が機」を「我が機」と知ることが出来ない。

この愚悪の凡夫が、自身を「愚悪の凡夫」と知るとは、愚悪の凡夫のチットやソットの反省や内観といった程度のことと知ることとは出来ない。愚悪の凡夫が、「我が機」は愚悪の凡夫であり、「地獄一定すみか」の、「無信心、無佛法」の「無有出離之縁の機」であると信知することが出来るのは、これひとえに「如来そのもの」「仏心そのもの」「大悲そのもの」「願心そのもの」が向うから、この「愚悪の機」「無有出離之縁の我れ」と一体不離となって(即ち、他力廻向)大悲無倦常照我  
と照らしたまえばこそ、

愚悪の機

地獄一定の無有出離之縁の機

三定死の機と

思い知られるのであって、  
「如来そのもの」「仏心そのもの」「大悲心そのもの」の廻向、即ち、眞実信心の廻向無くしては、凡夫が凡夫と知ることができない、地獄一定の無有出離之縁の機と信知することが出来ない、  
如来の眞実信心の御廻向のオハタラキ無くしては、

このような「無有出離之縁の機」は「ただ念仏のホカナイ」と知ることが出来ない。

又、他力廻向、如来廻向の眞実信心に依らざれば、如来そのもの、仏心そのもの、大悲そのもののお力に依らざれば

無有出離之縁の機を無有出離之縁の機と知ることが出来ないと同時に、  
こうした我からの「往生出離之道」は、ただ念仏よりホカナイということを知ることが出来ない。

さらに「機」は「助からぬ機」  
「法」は「助けたもう法」

と知つても、  
その「法」をタノム、信ずる、その「法」にはからいなく任せる  
ということが、他力廻向、如来廻向の眞実信心のハタラキに依らざれば、凡夫のハカライでは、絶対に不可能なのである。

それで、  
「墮つる機」を「墮つる機」と知るとも、「お助けの法」を「お助けの法」と知るとも、「墮つる機」が「お助けの法」を信じ、タノムということも、ハカライなくマカセルということも、スベテ他力廻向の信心、如来廻向に依らざれば不可能なのである。

この生まれ乍らにして、無佛法、無信心の者のハタラキでは、絶対に不可能なのである。それらのスベテは「如来そのもの」「仏心そのもの」、大悲心そのもの、向うからのオハタラキ、即ち他力廻向、如来廻向に依らざれば、ワレワレ凡夫としては不可能なのである。

一席の法話を聞くことも、一ト声の称名を称えることも、こうして御法について、文通出来ることも、ワレワレ愚悪の生まれながらにして無佛法、無信のワレワレの力では不可能なのである。

その「不可能」が、はからずも、出来る、可能であるところに「如来廻向」「他力廻向」と言わざるを得ぬのである、そういたただかざるを得ないのである。

(続く)